「英語学習に関する継続調査」から英語教育を考える

発表者・登壇者：
根岸 雅史（東京外国語大学）
アレン玉井 光江（青山学院大学）
金森 強（文教大学）
和泉 伸一（上智大学）
酒井 英樹（信州大学）
長沼 君主（東海大学）
工藤 洋路（玉川大学）
津久井 貴之（大妻中学高等学校）

酒井 英樹 先生

酒井先生：第1部では、「英語学習に関する継続調査」（ベネッセ教育総合研究所）の結果報告をした後、3つの柱をテーマに討論を行い、根岸先生に総論をお話しいただきます。

本調査は、2021年3月に全国の高校3年生991名を対象に実施したものです。東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所の「子どもの生活と学び」研究プロジェクトの調査モニターを対象としています。2015年3月に調査を開始し、小学6年生時、中学1年生時、中学3年生時、高校1年生時、そして2021年は高校3年生時と、継続的に5回の調査を行っており、322名が全5回に回答しています。今回は、高校3年生時の調査結果を軸に、過去の結果と比較していきます。

まずは、「高校3年生の時の英語の授業の中で、次のようなことをどれくらいしていましたか」における各項目の「よくしていた」と「ときどきしていた」の回答結果を合計した割合を見ます（P.2 図1-1）。

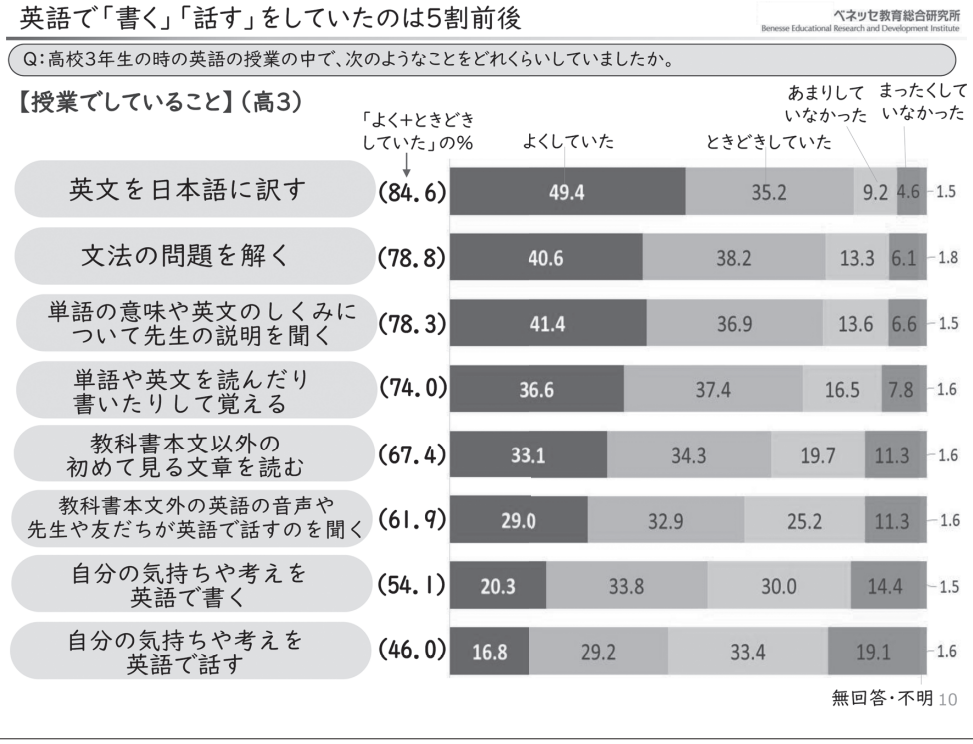
「英文を日本語に訳す」が最も多く84.6%、次に7割以上が、「文法の問題を解く」「単語の意味や英文のしくみについて先生の説明を聞く」「単語や英文を読んだり書いたりして覚える」と回答しています。次に、中3、高1、高3での継続的な変化を見ると、「日本語に訳す」「文法問題を解く」「先生の説明を聞く」「覚える」は、どの学年でも比較的多く行われている活動ですが、「英語を読む」「英語を聞く」「英語で書く」「英語で話す」は、学年が上がるにつれて若干減る傾向が見られます。「英語で書く」は、中3の時は65.4%、高1では57.3%、高3では54.1%と下がります。「英語を読む」は、中3から高1でやや下がった後、高3では

大きく上昇します。入試対策の影響もあり、初見の文章を読む活動が高3になると増えるので、読む活動は増加傾向にあるのでしょう。

次は、「好き・嫌い/得意・苦手/意欲・動機づけ・言語観」です（図表省略）。高3卒業時点で「1）英語は好きですか」「2）あなたは、英語が得意ですか、苦手ですか」を聞いた結果、56.7%が「とても好き」「まあ好き」と回答し、41.4%が「とても得意」「やや得意」と回答しています。小6時からすべてに回答している322名を見ると、学年が上がるにつれて「とても好き」「まあ好き」は減りますが、高3の5割強が、肯定的に英語を捉えて高校を卒業していきます。一方、「得意」に関しては、高校入学時に「苦手」と回答する生徒が増え、高3でも増加傾向にあります。小6から高3までの変容を見ると、どの調査でも一貫して「好き（とても+まあ）」と回答した生徒は30.7%、「好きではない（あまり+まったく）」と回答した生徒は8.7%でした。着目したいのは、「好き/嫌い」が変容している生徒が約6割いることです。学校の経験の中で、好きになったり、嫌いになったり、その時々の条件によって揺れ動いています。「得意/苦手」を見ると、一貫して「得意」と回答した生徒は23.9%、「苦手」と回答した生徒は15.2%でした。変容している生徒は60.9%で、「得意/苦手」を行き来しています。「好き」と「得意」のクロス集計を見ると、「好きであり、得意である」生徒の数はだんだんと減り、「好きであるが苦手である」、「嫌いであり苦手である」は、高校生になるにつれて増えていきます。

次は、高3卒業時の「意欲・動機づけ・言語観」です（図1-2）。「これからも英語を頑張って勉強したい」が61.7%、「英語以外の言語も学びたい」が58.1%、「今後、英語の資格・検定試験を受検するつもりだ」が53.6%、「英語がわかったり通じたりするとうれしい」が89.0%です。肯定的に捉えている生徒がいる一方で、高3卒業時点で61.0%が「英

図1-1



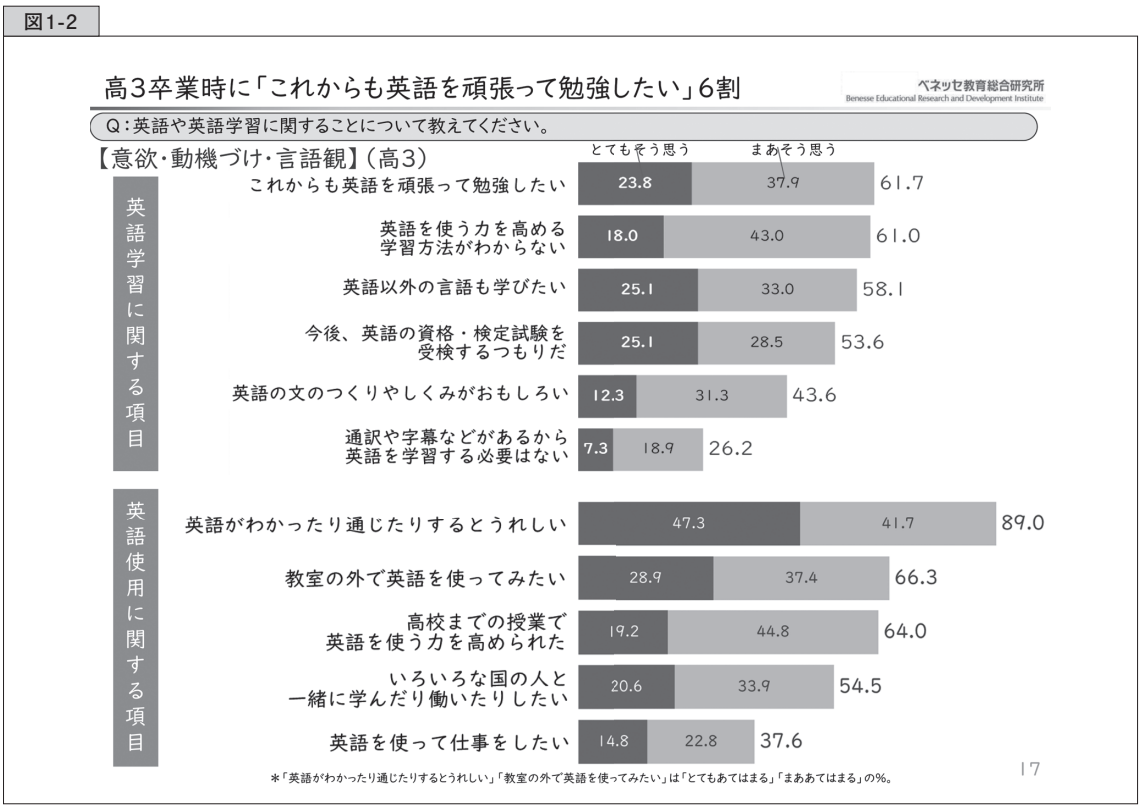
語を使う力を高める学習方法がわからない」と回答しています。

P.4　図1-3は、意欲・動機づけ・言語観と言語活動をクロス集計したものです。ここでは高3時、授業で「自分の気持ちや考えを英語で書く」と「自分の気持ちや考えを英語で話す」の両方の活動を「よくしていた/ときどきしていた」群を「言語活動有り群」（421名）、それらの活動を「あまりしていなかった/まったくしていなかった」群を「言語活動無し群」（405名）とし、意識面での違いを分析しています。「言語活動有り群」は、どの項目においても「言語活動無し群」よりも肯定的です。例えば「教室の外で英語を使ってみたい」では、「言語活動有り群」の79.6%に対し、「言語活動無し群」は52.6%です。しかし、「英語を使う力を高める学習方法がわからない」は、言語活動の有無にかかわらず約6割の生徒がそう思うと回答しています。

次は、言語活動の取り組みの様子と高3卒業時の意欲の違いをクロス集計した図です（P.5　図1-4）。中3時と高1時に、「先生や友だちが、英語で話すのを聞くのが楽しい」「初めて見る英語の文章を読むのが楽しい」などの6項目について四件法で聞きました。その回答を得点化し、合算して、合算値が平均値を上回った群を「英語を楽しく使う経験が多かった群」、合算値が平均値を下回った群を「英語を楽しく使う経験が少なかった群」として、高3卒業時の意欲を比較しています。比較結果は顕著で、中3時と高1時に楽しく英語を使う経験をした生徒の「英語学習意欲」「英語を使う意欲」「異文化・他言語への興味関心」は、楽しく使う経験が少なかった生徒より高い結果が出ています。

さらに、「これまで（幼い時から高校卒業まで）の英語や外国に関わる経験のうち、あなたにとって、もっとも印象に残っている経験」の自由記述回答をまとめました。「学校での経験」を記述した生

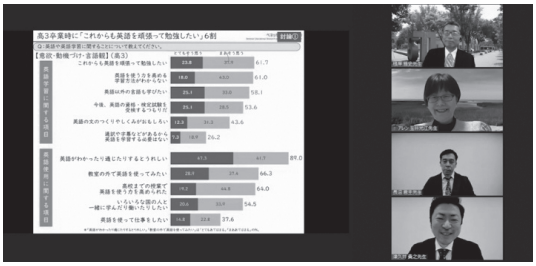
図1-2



徒が多く、他にはうれしい、伝わったなど「自分が主体」の経験や、「校外学習」「ホームステイ」「留学生との交流」がありました。特に「学校での経験」における「英語での授業」が印象に残っている生徒が多く、これは教える立場として意識しておきたい点です。英語の授業や学校での英語活動が、言語観、態度面、好き嫌いに影響を及ぼす可能性が高いと考えられるからです。

ここまで調査結果の主な内容をかいつまんでお話ししました。この後は討論の時間となります。

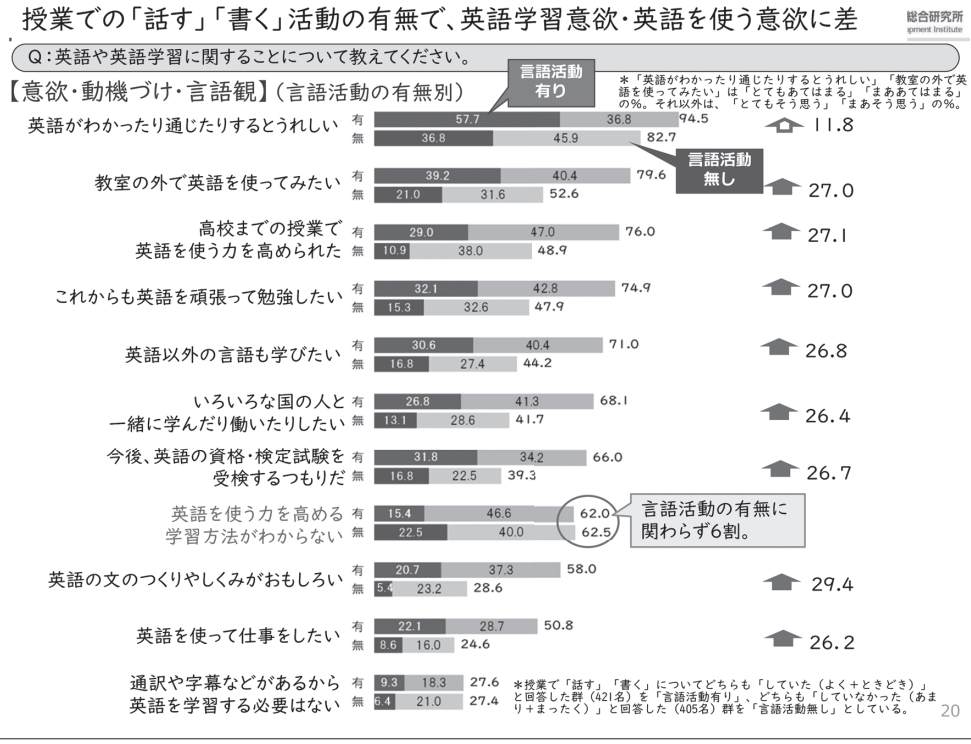
根岸先生：ここからは、酒井先生の報告を受け、3つの討論を行います。テーマは、討論1「高3生の英語学習への意識」、討論2「意欲と言語活動」、討論3「言語活動と学習方法」で、それぞれのテーマで3名の先生に、各3分程度お話しいただきます。



【討論1】高3生の英語学習への意識

討論1では、「高校卒業時に生徒にどのような意識や態度であってほしいか?」を考えていただきますが、その前に軽く振り返ります。高3時の「意欲・動機づけ・言語観」(P.3　図1-2)を見ると、英語学習に関する項目では「これからも英語を頑張って勉強したい」が一番多く、「通訳や字幕などがあるから英語を学習する必要はない」が一番少なくなっています。英語使用に関しては、「英語がわかったり通じたりするとうれしい」が圧倒的に多く、「英語を使って仕事をしたい」は多くなかったです。

図1-3

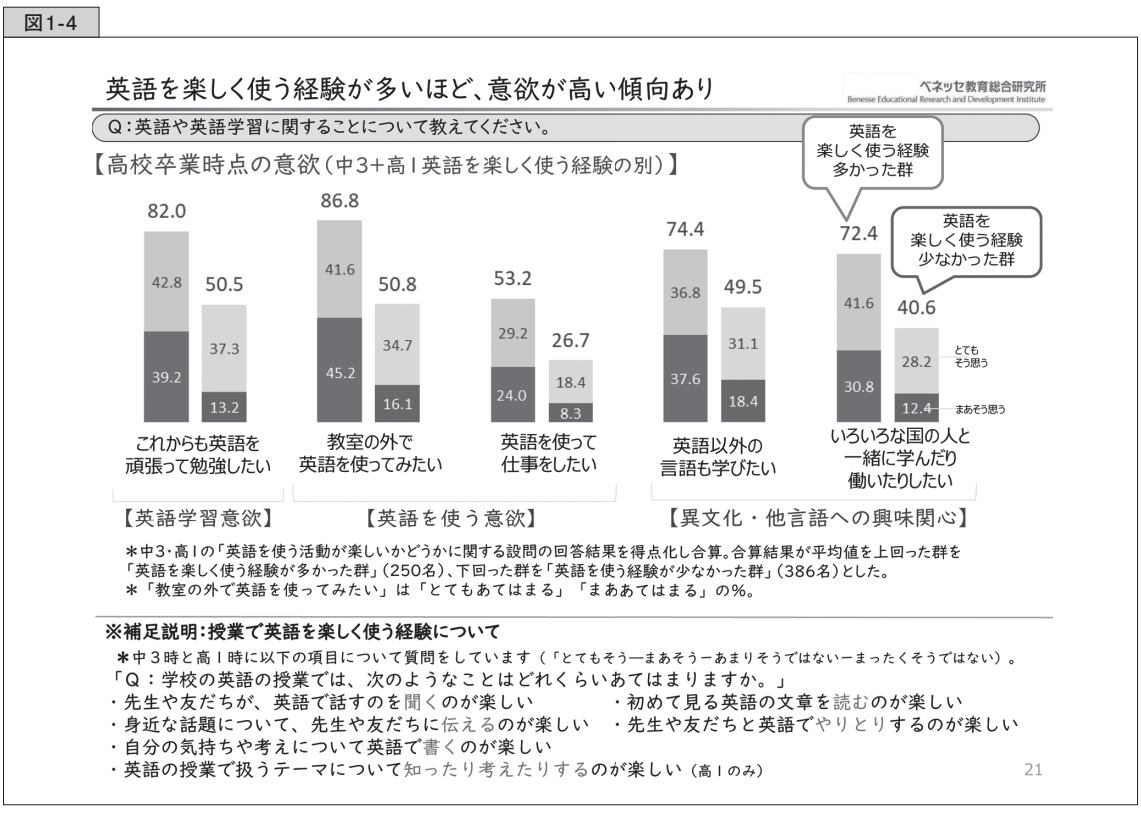


長沼先生：小・中・高の発達を踏まえながら話をすると、高校卒業時までに意識してほしい、力をつけてほしいことが3点ほどあります。1点目は、評価への抵抗感を減らし、学習改善のために自分の力を知るという評価の捉え方をもって卒業してほしい点です。小学生においても学年が上がるにつれて評価への不安が高まり、だんだんと自分の力を知ることへの抵抗感が出てきます。Can-Do評価等が取り入れられていますが、目標設定時に、自分の力を知りたいと生徒が思っているかが気になります。自分の力を知りたい気持ち、評価への抵抗感がない状態で言語活動を使用場面と捉え、自分の力を知るチャンスを自ら探していかないと、自己学習の改善につながらないからです。学習改善の前に、自分の力を知りたい気持ちを育ててほしいです。英語を使って相手と分かり合え、通じ合えることは、うれしい気持ち、外で英語を使いたい気持ちへとつながりますが、通じ合ったうれしさだけでは、自己効力感はうまく高められない気がします。

2点目は、英語を使う場面についてです。将来すべての人が、英語を使う仕事に就くわけではありませんが、広い意味での言語文化への興味を深めてほしいです。いろいろな国の人と一緒に学び、働かなくても、国際社会に参画している、かかわっている意識をもたせ、使用イメージを具体化できるようにしたいです。調査報告で紹介された「言語活動有り群／無し群」の結果（図1-3）には、大きな開きがありました。言語活動が増えることで、生徒の意識が高まり、使用イメージができ、英語を自己の将来にかかわるもの、プラスなものとして捉えることができるようになるからだと思います。

3点目は、曖昧さに耐える力です。全部が分からない、通じない曖昧さに耐えることができないと、全部の答えを教えてほしいという思考になってしまいます。高校生になるにつれて、より自我が育ち、抵抗感が出てきますが、そこを乗り越え、言語

図1-4

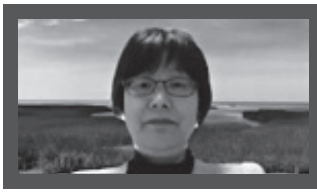


文化への興味、社会への参画、自分なりの目標をもって現実場面での曖昧さに耐え、対処できるように育っていってほしいです。

津久井先生：さきほどの調査（図1-2）では、「これからも英語を頑張って勉強したい」と約6割の生徒が答えていましたが、英語が苦手で、学習につまずきがある私の担当している生徒を考えた時に、6割は多い印象を受けました。また、89.0%の高校3年生が「英語がわかったり通じたりするとうれしい」と回答したことから、その経験の大事さを感じ、英語を使ってできること、文化への関心、考え方、情報等を取得できている実感を卒業後も維持できる授業にしていかなければならないと思いました。言葉を使うことは難しくもありますが、人を勇気づけることもできるので、通じた時のうれしさや言葉への感覚は、大事にしていきたいです。

先日、高校3年生の最後の授業を終えました。そこで、脳性麻痺のお子さんがいる父親が、車椅子やボートに息子を乗せてトライアスロンやフルマラソンに参加した話を扱いました。彼らの思いが込められた一文“Everybody should be included in everyday life.”を、生徒なりに解釈し、表現することを最後の活動として設定しました。生徒たちの様々な感性や発想、身につけてきた英語の力がみえてきました。1つ紹介すると、「全ての人にそれぞれの日常があり、人生がある。この世に必要とされない人はいない。

Everybody has their own life. Everyday life needs everybody.」と書いた生徒がいました。このような感覚をもつ子どもたちを1人でも多く育てていきたいと思います。



アレン玉井
光江 先生

アレン先生：私は、これから成人していく人たちが、英語にかかわらず、どのような意識や態度をもってほしいか、また彼らがどのような時代に生きているのかを考えてみました。世界経済フォーラムの「The Future of Jobs 2020」によると、現12歳が成人した時には、今ある65%の仕事は存在せず、第4次産業革命による技術改革は、肉体労働だけでなく、頭脳労働も奪っていきます。新しく創出される労働のほとんどには、現在より高度な頭脳労働が求められ、この変化に対応するために、私たちは学び続けなければなりません。このような時代の中で、世界市民としての意識、創造力を獲得することが必要となります。ITスキル、対人スキルを身につけ、問題解決型の学習、協同学習を通して、生涯学習していける力を高校卒業時までに身につけられている生徒は幸せです。

調査データ（図1-2）の「これからも英語を頑張って勉強したい」61.7%、「英語以外の言語も学びたい」58.1%、「教室の外で英語を使ってみたい」66.3%の結果から、生涯を通して英語に触れ、学習したい思いが見られます。また、「いろいろな国の人と一緒に学んだり働いたりしたい」54.5%、「英語を使って仕事をしたい」37.6%は、世界市民としての意識や対人スキル、協同学習との関連性を感じました。外国語環境で勉強をしている日本人の多くにとって、英語は教科であり、生活言語ではありませんが、英語をおしゃれ着としてではなく、身につけておかないと労働ができない労働着としての意識改革が必要だと思います。

最後に、「高校までの授業で英語を使う力を高められた」生徒が64.0%いる一方で、「英語を使う力を高める学習方法がわからない」生徒が61.0%

います。英語を使う体験により力を得たと思っても、卒業して教室で学ぶチャンスがなくなると、自分でどのように学習すればよいかが分からないことの表れなのかもしれません。大学においても、同じように感じている学生が多いので、この数値が気になりました。

根岸先生：この（図1-2）の結果から、様々なことを考えさせられました。個人的な視点になりますが、「これからも英語を頑張って勉強したい」と「英語以外の言語も学びたい」が同じ程度の割合であることから、英語を学習してきたにもかかわらず、英語の学びを通して英語以外の言語に興味をもつことに、面白さを感じました。様々な観点を出していただきましたが、深掘りしたいこと、追加したいことなどはありますでしょうか。

長沼先生：根岸先生が今おっしゃったことは、私も面白いと思いました。生徒が英語以外の言語、Englishプラス1をどのようなきっかけでもつのかを考えてみました。今後必要といわれているので違う言語を学びたい、または、新たな言語を学ぶことでのリセット、英語は苦手だが、他の言語を学ぶことで再スタートでき、自信をつけられると考える生徒もいるかもしれません。英語がベースとなり、他の言語を学ぶ際のブーストになる。英語を学んだ経験がうまくつながればよいと思いました。

根岸先生：「英語がわかったり通じたりするとうれしい」は、他の言語でも感じられることで、さらなる「うれしい」につながるのかもしれません。アレン先生からは、生涯学習のお話もありました。高校卒業時までの英語の学びが、その後のいろいろな学びにつながり、可能性を広げていく点については、いかがでしょうか。

アレン先生：我々の若い時と比べると、言語だけでなく、身につけなければいけない知識、技能の多さは、雲泥の差です。そのため、今世界中の学校教育におけるカリキュラムが大きく膨れ上がっており、課題となっています。学校で担保できる時間だけでは、学習時間は十分ではなく、追いつかない状態です。生徒自身がやらなければならないことが増える中、教室でできることは、自律的な学習者、エージェンシー（agency）を育むこと、そのために、教師にできる下支えを考えると、今まで以上に個々の学習者を深く知る必要があり、より高度な授業力が要求され大変になると考えられます。そのことを教師が意識しておく必要があり、教室の中だけでは、第4次産業革命に打ち勝つ頭脳労働力に必要な力の全てをつけるのは難しい現状があるように思います。

根岸先生：津久井先生、現場の視点からはいかがでしょうか。

津久井先生：まず教師自身が社会の変化に鋭敏でなければいけないのですが、どうしても学校の中に閉じこもりがちで、外の世界や外の人と触れ合っているかも含め、感覚が鈍くなってしまう状況にないだろうかと、アレン先生のお話をうかがいながら、危機感をもちました。これから不安定な社会に出ていく当事者の生徒たちは、私たち大人よりも「不安定な社会」「先が見えづらい未来」に対する肌感覚はもっているように感じます。調査報告にある、「違う言語を学びたい」「違う世界とのつながりを得てみたい」という思いから、入試や受験を意識した英語だけでなく、その先を見ようとしていると解釈することもできるのではないでしょうか。先が見えづらいというのは、逆に考えれば「可能性がたくさんある社会」ともいえると思いました。

根岸先生：討論1の先生方ありがとうございました。

【討論2】意欲と言語活動

根岸先生：討論2では、「話す・書く活動はなぜ重要か?」と「言語活動の質を高めるものは何か?」について考えていただきます。ここでは2つの資料を使用します。1つめは、意欲・動機づけ・言語観と言語活動をクロス集計した（P.4 図1-3）になります。「教室の外で英語を使ってみたい」と「いろいろな

国の人と一緒に学んだり働いたりしたい」では言語活動の有無による差が大きく、意識が違うことが分かりました。2つめの資料は、言語活動と高3卒業時の意欲の違いをクロス集計した図（P.5 図1-4）で、英語を楽しく使う経験が多いか少ないかで大きな差が見られます。

和泉 伸一 先生

和泉先生：この調査は、言語活動の大事さや、生徒の立場から感じていることが分かる大事な調査です。話す・書く活動、アウトプット活動は、教わったことを練習して自動化して使えるようになることの重要性は自明ですが、使うことそれ自体が、学習活動の過程として重要です。使うことは学習の一部であり、学んでは使い、使っては学びます。つまり言語習得とは、教わったことを練習して積み重ねていくというように直線的に進むよりも、行ったり来たりジグザグな過程を通して、うまくいかないこともありながら、振り返ったり反省したりしながら、進んでいくものです。使った後に得たインプットや教わったことから「なるほどこう言えばよいのか!」と気づいた生徒は、「もう一度やらせてください!」と言います。うまくいかなかったことを“リベンジ”しながら、2回、3回とタスクを繰り返すことで、インプットの吸収率は大きく上がっていくのです。アウトプットをすることで頭の中に“学びの空間”が生まれ、その中にインプットが効果的に入っていくと考えられます。

「言語活動の質を高めるものは何か?」で大事になるのは、どのようなタスクを与えるかです。タスクの質や内容が、年齢に相応したものになっているかも大事です。学年が上がるにつれ、ただ知っている言葉を披露するディスプレイ活動ではなく、認知思考を刺激する内容があること、本当のコミュニケーション活動としてどうするとよいかを考えていくことが必要になります。

アレン先生：調査結果から、産出スキルである話す・書く授業を行った学習者は、英語学習に積極的に取り組み、学習を続けようとする態度が見られます。聞く・読むは、意味にアクセスする活動であり、話す・書くは、意味をつくり出す、表現する活動です。言語産出には、その言語を理解し、その知識を使う力が必要です。具体的には、単語を知っているかどうか、文法を正しく使うことができるか、発音ができるか、つづりが正しく書けるかなどです。言葉は、自分の中から出すことで、初めて自分の言葉に触れることができ、それを客観的に評価することができます。頭の中だけでなく、自分の体を通して言葉を発することで、言語の仕組みやつくりを再認識し、言語についての意識的理解、メタ言語力が育成されます。このことは、調査の「言語活動有り群/無し群」の差が、「英語の文のつくりやしくみがおもしろい」に大きく出ているところに表れていると思います。言語を自分のものにすることをLanguage Ownershipと呼びますが、これは言語産出の過程を通して、言葉が自分のものになっていく実感を得ることです。相手に言葉が通じたうれしさや学校外でも使用したい、勉強したいなどの内的動機を支える経験になります。ここでは話す・書く活動に触れましたが、産出活動の有無に伴い、聞く・読む活動の質も高まると想像します。私たちは意味を構築するために言語活動を行うので、言語活動は学習者にとって意味ある活動であることが大切です。それは年齢が低ければ低いほど顕著で、言語能力がまだ十分に発達していない子どもこそ、言葉の本当の意味を求めて言語活動をしています。Meaning must come first. これは小学校、幼稚園で教えていた時から私の教えのprinciple（方針）としてきました。

酒井先生：自己評価につながり、使う力をつけた実感をもつことができる、話す・書く活動は重要です。自分が使えるどうかは、やってみないことには分からないまま進んでいきます。質問項目「高校までの授業で英語を使う力を高められた」での「言語活動有り群」に見られた意識の高さは、試行錯誤しながらも力が徐々に高まっている実感を示していると思いました。

また、言語活動には、人や社会とかかわるために発言をしていく、意見表明をしていく側面もあります。クラスの目標について議論する中学校の授業では、意見を伝えないと目標が変わってしまう、あるいは、意図通りにならなくなってしまうので、生徒が懸命に英語で意見を述べる姿がありました。このような活動から、働きかけること、社会とかかわっていくことの重要性や価値を学ぶことができます。

そして、楽しさを感じることができる言語活動は、活動自体に自分たちが行う意義や満足、自信が得られることが重要です。言語活動の楽しさを生徒自身に聞く調査は少ないので、貴重な結果を得ることができたと思っています。

根岸先生：最近、高校3年生の授業実践を聞いた時に、受験を踏まえ、聞く・読むに注目する話が多くの先生からありました。しかし、本調査結果から、話す・書く活動の減少がもたらす、言語習得への影響、実際の入試結果との結びつき等について、改めて考えさせられました。

和泉先生：先日ある高校で、1、2年時はアウトプット活動を行いますが、3年時は受験に備えてアウトプット活動は行わず、入試問題の演習に時間を充てると話されていました。調査の「言語活動有り群/無し群」で「英語の文の作りや仕組みがおもしろい」に大きな差が見られましたが、言語活動の影響で分析的な学習に対する意欲や、主体的に学ぶことへの意識が高まることを示した結果だと思います。アウトプット活動を極端に減らした高校3年生の授業は、生徒の学習意欲と学習効果を下げてしまわないのか、それで本当にどこまで効率的かつ効果的な学習につながっているのか、もう一度考え直す必要があるように思います。他の方々はどのようにお考えですか。

根岸先生：私も興味深いデータだと思いました。実際に話をしたり、書いたりする中で、うまくいかない経験をし、文法のありがたみを感じるのかもしれません。この感覚ができる前に言葉の仕組みを説明しても、生徒は学習する意味を感じることができないのかもしれません。

アレン先生：産出経験は、相手に通じるためへの工夫や思考判断を働かせます。小学校では、よくbig voiceと言われますが、大きな声を出す必要はなく、自分で自分の言葉を聞くだけの声を出しなさいと伝えています。自分とモデルの差に気づき、自分がどのような言葉を出しているかを知るためです。英語だけに限らず、自己評価する力を育てるためには、メタ言語力、メタ認知力をつけていくことが大切です。アウトプットする中で獲得していく力だと思います。

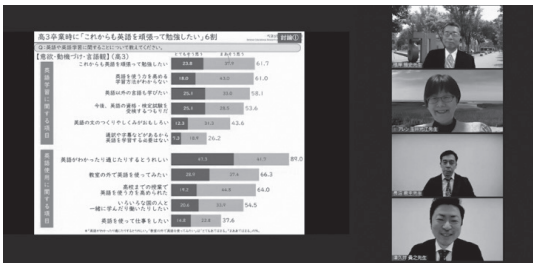
酒井先生：アウトプットは、インプットの意味合いをより強めます。伝えたいからこそ読み、読んで理解しようとし、文法的なものを求めていきます。受験に備え、アウトプット活動を減らすことは、逆効果ではないかと思います。一部の高校入試では、書いて表現をする問題はないため、読んで問題を解く演習だけを行う中学校もあるようです。ここ20年間で、高校入試、大学入試は大きく変化し、読んで書く問題や聞いたことに基づいてコメントする問題が増えました。話す力を問う問題はまだ不十分ですが、入試の変化を考えると、今後はさらに変わり、我々も出口を意識して変わっていく必要があると話を聞きながら思いました。

和泉先生：「授業で英語を楽しく使う経験」を具体的に聞く設問には、「聞くのが楽しい」「書くの

が楽しい」「伝えるのが楽しい」と様々な楽しい経験が挙がりました。ここで言われている「楽しい」とは、知的な部分を刺激する、中身が伴った楽しさを表しており、つまり“meaning comes first”の重要性を示していると捉えられます。楽しさにおける質は、児童生徒の発達に合わせて変わり、遊びのイメージが先行したゲームだけが言語活動ではありません。そういった意味で、児童生徒はいろいろな種類の活動に「楽しさ」を感じているようですが、皆さんはどのように思われますか?

根岸先生：徳島県のある学校の発表で、オーセンティックなものから自分の好きなことを調べて、発表する夏休みの課題に関する話がありました。生徒全員がそれぞれ違う内容をレポートし、定められた時間以上に熱心に発表を聞く姿があったそうです。自分が興味のあることを発表する、友だちが興味をもって調べてきたこと聞く。そこに楽しさがあり、知的な内容が意識の変容をもたらすように感じました。

酒井先生：まさにmeaning must come firstで、伝えて楽しい、伝わって楽しい、相手が言うことから学べるコミュニケーションの楽しさを意識させ、求めていかなければいけないと思います。コミュニケーションは、意思疎通以外にも楽しく時間を過ごすというニュアンスで捉えられていたりもするので、自分の言葉でリアルに思いを伝え合い、働きかけ、情報のやり取りをし、相手が言ったことを受け取り、理解できる力を育てる言語活動をしていかなければいけないと、改めて思いました。



【討論3】言語活動と学習方法

根岸先生：討論3では「言語活動をやっていてもいなくても、学習方法が分からないのはなぜか?」と「学習方法が分からないにどう答えるか?」を考えていただきます。意欲・動機づけ・言語観と言語活動をクロス集計した結果(P.4　図1-3)では、言語活動の有無による差が見られましたが、「英語を使う力を高める学習方法がわからない」では、言語活動の有無にかかわらず6割程度の生徒が、学習方法が分からないと答えています。言語活動を行っているのだから、学習方法は分かっているのではないかと考えてしまいますが、言語活動の有無による差は意外と小さいという興味深いデータなので、考察していただこうと思います。

金森先生：伝えたいのに伝えられない、他の語句や文構造を使うなど、工夫をして伝えると伝わった!　という体験から、学習者は様々なことに気づきます。教室の中の活動では、その体験が起こりにくいことが、学習方法が分からない理由の1つかもしれません。授業では、規定路線で進められるので、相手が察してくれる部分もあるため、伝えられないという状況はあまり起こりません。言語活動において、本当に伝えたいという目的・場面・状況ができているかも意識したいところです。料理がうまくなるために試す工夫のように、あの手この手をしながら、気づいたらうまくやるコツが分かってきたという体験が、教室の中ではつくりづらいからです。コミュニケーション活動では、相互を意識して話すことに気づけることが大切なので、気づかせることが重要となります。

アクティブ・ラーニングのlearning by doingも

同じ考え方です。必ずreflectionを行うことも大切になります。実際に体験をしてみて、自分たちがどのように成長してきたのか、何ができなかったのか、どうしたらうまくできるようになったのかを振り返る時間をつくることで、気づきが生まれます。言語活動の経験の有無にかかわらず、学習方略に関する気づきが生まれる振り返りの大切さに意識がいくことが重要です。

フィンランドのナショナル・コア・カリキュラムを見ると、ラーニング・ストラテジー習得が目的にしっかり入っています。日本の学習指導要領の中には入ってきていないので、これから考えていく必要があると思いました。

和泉先生：言語活動を行っているが、学習方法が分からないと答えている生徒が6割もいる結果から思い出したのは、何年も様々なタスクを実行し続けているのに、英語が一向に上手にならないテレビのエンターテインメント番組に出てくる人物です。ここから学べることは、コミュニケーションに対する積極的な態度は素晴らしいけれども、ただ回数をこなしているだけではうまくいかないということです。Task-Based Teachingの研究にありますが、継続的にタスク活動を行うことは、交流を豊かにし、遂行する力を成長させますが、一方で、活動への慣れからやり取りをする回数や意味交渉が減るなど、効果が薄れてしまうこともあるようです。つまり、タスクを与えさえすれば生徒の気づきが勝手に生じるのではなく、タスクの構成や、適宜で適時な教育的介入が必要となります。振り返りの時間は、どの部分に、どの程度入れるべきなのか、気づかせる部分は何なのか、そのための工夫はどのように入れるべきかなど、様々なことを考えたタスク・プランを考える必要があります。タスクの回数が多ければそれでよしということではないのです。

また、ストラテジー・トレーニングも大事です。ストラテジーには大きく分けて、コミュニケーション上のトラブル解決のためのコミュニケーション・ストラテジーと、学習を促進するためのラーニング・ストラテジーの2種類があります。コミュニケーションをうまく取ろうとする、相手の言っていることを理解しようとする、言いたいことをどうにか相手に伝えようとするなどのコミュニケーション・ストラテジーを何度も使い、それに加えて振り返りを入れることで、それはラーニング・ストラテジーともなり得ます。受験対策だけでなく、その後の人生につながるコミュニケーション能力を伸ばすためのストラテジー・トレーニングを考えていかなければならないでしょう。言語的な能力や知識も当然大事ですが、どのように言語的な問題やコミュニケーションの問題を乗り越えていくかも重要なコミュニケーション能力の一部であるので、タスクを与える中でそういったストラテジー・トレーニングをどのように織り交ぜて指導していくかが、今後より一層重要となってくるでしょう。

工藤先生：「学習方法が分からない」を考えた時、今の自分に学習方法が分からないことがないか、置き換えて考えてみました。2部でも話をするので、英語だけではない話をしようと思います。最近また走り始めたのですが、今は走り方、練習の仕方が分からない状態です。学生時代に長距離を走っていたので、走り始めた頃は高校時代と同じ主要な3つのメニューを行っていましたが、少しやり始めると欲が出てきて、本やネットで調べて、多様な練習方法に出合い、それらをインプットした今は、逆に何をやってよいのかが分からなくなってしまいました。これは、高校3年生にもあてはまるかもしれません。授業の中で言語活動が増えて、様々なことを行っているから、どれが能力向上に貢献するのか、選択肢があり過ぎて分からないのかもしれません。これは、授業を行う面では悪いことではないと考えます。いろいろなことを経験し、多様な教材に触れ、いろいろなステップを踏むことで、どれを使えば自分の英語力向上につながるの

かが分からなくなるかもしれませんが、もう少し成長すると分かるようになる、とポジティブに捉えてもよいのかなと思います。ただ、生涯学習として英語学習が求められるのであれば、少しずつ自律させなければいけないので、ストラテジー・トレーニングなども必要になると思います。

根岸先生：豊かな言語活動が提供されていますが、授業をずっと受けていると、何がポイントなのかをメタ認知的に気づけず、流れるままに参加してしまい、自分でどうしたらよいかを考えることが少なくなっているのかもしれません。金森先生からは振り返りのお話、和泉先生からは教育的介入という言葉がありました。それらを行わないと、言語活動を行っていても、活動のポイントがきちんと伝わらないのかもしれません。皆さん、どう思われますか。

金森先生：フィンランドの学校を訪問した際に、European Language Portfolioを使って、振り返りを丸1日かけて行う話を聞きました。自分たちがどのように変容しているのか、これからどういう力をつけていくのか、自分の学びをしっかり見る、Ownership of Learning の意識を学習者につけていく、その意識をもった指導がなされています。教材もその視点からつくられているので、学習者はいろいろなことに気づくことができ、また、自分で整理整頓していける仕組みの教材となっています。日本でも、文法を明示的に分かりやすくまとめた教科書だけでなく、ラーニング・ストラテジーの育成も含めて、どのような教科書が望ましいのか、現場の先生がしっかり選べるようになることを願いたいところです。

根岸先生：日本の先生方は、話す・書く活動をされている、されていないにかかわらず、先生とはこうあるべし、と規定するところがあるように思います。生徒自身が、どうしたらよいかを考える時間や丸1日かけて振り返る時間をもったいないと感じ、それよりも学習を進めたいと考える先生が多いのかもしれません。

和泉先生：指導と訓練はあってよいと思いますが、ストラテジー・トレーニングで一番大事なのは、先生自身がストラテジーを使っている姿を生徒に見せていく、teacher role modelingが重要です。リーディング活動やリスニング活動でのストラテジーは見えづらいですが、スピーキング活動では目に見える形で示すことは比較的容易です。言い方に困った時には、使える言い方を提示したり、ジェスチャーと一緒に言葉を与えたり、教えると同時に先生が日頃からティーチャー・トークの中で使っていくと、生徒は実践の中で気づくことができます。先生がライブでモデリングをすることで生徒は実感しやすくなり、先生自身もモデリングを通して、英語を英語で教えることにどんどん慣れていきます。

工藤先生：先生の役割の話、英語を英語で教える話があったので、その観点で何人かの中学や高校の先生の授業を思い浮かべていました。日本語で授業をしている時は雑談が多く、学習方法や自分が高校生の時にしていた勉強方法などを語る先生もいるのですが、英語での授業になると、その要素が入りづらくなる傾向があるようです。活動の意義を語りたいけれど、それを英語で伝えると、読むテキストよりも先生が語る英語の方が難しくなるので、そのような話をしにくくなるようです。活動の指示を出す時も活動の意義や活動をする時にどのように考えたらよいのかを英語で説明することに、難しさを感じる先生も多いのではないかと思います。

根岸先生：英語使用をどのようにするかについても考えなくてはならないですね。

和泉先生：オールイングリッシュでの授業を忠実に行おうとする意識から、日本語を入れてはいけないといった風潮がある気がします。

Translanguagingとも言いますが、日本語を

交えることで生徒との距離を縮められ、教師が自分を出せるというSociallinguistic的な機能もあります。最大限に英語を使用する努力をしながら、必要に応じて日本語を交える感覚です。教師は完璧なモデリングを示さなければいけないと思ってしまうと、プレッシャーが強くなり過ぎてしまい話せなくなってしまいます。また、そういったプレッシャーは伝染しますので、それが生徒にも過大なプレッシャーを与えることにつながってしまいます。生徒が、先生のようにはなれないと感じたり、距離感ができてしまうこともあります。流暢に話すネイティブの英語を、生徒がロールモデルとして受け止めないのと同じかもしれません。日本人の先生が一生懸命話す英語だからこそ、ロールモデルとなれるのです。

根岸先生：学習指導要領の解説の中に、英語使用や英語での授業について書かれているので、ぜひ皆さんにも読んでいただきたいです。

金森先生：学習者が学習方法に気づくためには、自分が言葉につまり、何ができていないのかを気づいていないといけません。また、即興的な活動も大切です。中でも、読んだものに対してその場で対話をするといった統合的な活動、さらには、初めて聞いたものに関して対話をする活動を実施していただければと思います。これからは、音声言語にも力を入れていく必要があると思うからです。大切なのは、教師が学習者にどれくらいモチベーションをもたせられるか、学び続けさせられるかです。

根岸 雅史 先生

根岸先生：中身の濃い議論、深掘りができたと思います。ここからは、第1部を通して気づいたことをいくつか振り返りたいと思います。

「通訳や字幕などがあるから英語を学習する必要はない」と感じている生徒が少なかったことは意外でした。これだけ機械翻訳が進化すると、生徒は英語を学ぶ意義を感じなくなると思っていましたが、実際には翻訳ソフトなどを使いながら学ぶという、新しいフェーズが生じています。

自由記述回答をまとめたマッピングを見ると、学校外のイベントもありますが、授業に関する記述が多く、授業のあり方が生徒の英語の認識に与える影響の大きさを感じました。

ここでは、実際に言葉を使う経験である話す・書く活動を言語使用の経験と定義づけていますが、話したり書いたりすることを意識しながら、聞いたり読んだりすることは、何もない中で、聞いたり読んだりすることとは違ってくると思いました。教室内であろうとなかろうと、リアリティーのある意味のやり取りの重要性を改めて認識した気がします。

ポートフォリオなどの話につながりますが、CEFRの中では、言語学習はLife Long Learningと言われています。教えている時にはそこから先を意識することは少ないかもしれませんが、言語学習は高校卒業時に終わるわけではなく、そこから長い人生を通して続いていきます。授業での学びのあり方のイメージがよい形で醸成され、引き出していけるとよいと思います。授業から受けるものを考えると、小学校、中学校、高校の英語教育には、ある種の責任があると感じた次第です。